

第3章

加古川市の高齢期人口の意識 平成13年度市民意識調査報告から

第3章目次

- 1 加古川市平成13年度市民意識調査について
 - 1.1 調査の概要
 - 1.1.1 調査の目的
 - 1.1.2 調査の内容
 - 1.1.3 調査設計
 - 1.1.4 回収結果
- 2 調査結果の概要からみた高齢期人口の加古川市に対する意識
 - 2.1 市に対する全体評価
 - 2.1.1 住みやすさと定住意向
 - 2.1.2 生活評価にみる満足度が低いもの
 - 2.1.3 生活評価にみる重要課題
 - 2.2 市の将来像
 - 2.2.1 暮らしてみたいまち
- 3 第3章のまとめ

1 加古川市平成13年度市民意識調査について

加古川市は平成14年4月に特例市へ移行した。地域に密着した一層魅力あるまちづくりを市民と協働で進めていくことを目指して、平成13年7月に市民に対する意識調査を実施している。(平成9年から2年毎に実施)本章では、加古川市の高齢期人口の意識をまとめるに目的で、加古川市が実施したこの調査から高齢期にある市民から得たデータを抽出し、市に対する意識の分析と考察を行い、本書の構想のための基礎資料の一部とする。

1.1 市民調査の概要

1.1.1 調査の目的

調査の目的を表1に示す。

表1 平成13年度市民意識調査の内容目的

市民の生活実態や生活環境に関する意識、市政に対する要望など、多様化する市民ニーズを把握して今後の市政運営の基礎資料を得ることを目的とする。

出典：平成13年度市民意識調査

1.1.2 調査の内容

調査の内容を表2に示す。

表2 平成13年度市民意識調査の内容

- | | |
|------------------------|--------------------|
| (1) 市に対する全体評価 | (6) 男女の役割・考え方 |
| (2) 生活環境評価 | (7) 市の行財政改革に対する考え方 |
| (3) 市の将来像 | (8) 広域的なまちづくり |
| (4) 文化に対するイメージ・要望 | (9) フェースシート |
| (5) 公園の現状・公園でのボランティア活動 | (10) 市への意見、要望 |

出典：平成13年度市民意識調査

1.1.3 調査設計

調査設計を表3に示す。

表3 平成13年度市民意識調査の調査設計

- | | |
|----------|---|
| (1) 調査地域 | 加古川市全域 |
| (2) 調査対象 | 平成13年6月1日現在、住民基本台帳登載者および外国人登録者で満20歳以上の人 |
| (3) 標本数 | 5000サンプル |
| (4) 抽出方法 | 無作為抽出 |
| (5) 調査方法 | 郵送配布および郵送回収法 |
| (6) 調査期間 | 平成13年7月5日(木)～7月19日(木) |

出典：平成13年度市民意識調査

1. 1. 4 回収結果

回収結果を表4に示す。

表4 平成13年度市民意識調査の全体の回収状況

発送数	5000
実質発送数(発送数-返戻数)	4967
有効回収数	1819
有効回収率	36.6%

出典：平成13年度市民意識調査

本書では、退職前にある50～64歳の人口層を「準高齢世代」、65～74歳を「前期高齢世代」そして75歳以上を「後期高齢世代」とし、この3区分をまとめて高齢期人口としてきた。本章でも、表5に示した市民意識調査の年齢区分のデータを使用し、50代以上を高齢期人口として分析を進める。

50歳以上の実質発送数は2314票であり、これは全実質発送数の46.6%に当たる。50歳以上の有効回収数は1001票、有効回収率は55%となっている。また、回答率では50歳代が23.9%と最も高い結果となっている。(表5)

表5 平成13年度市民意識調査の全体の年齢別回収状況

	人口	発送数	返戻数	実質発送数	有効回収数	有効回収率(%)
20歳代	40590	971	1	970	227	23.4
30歳代	36985	891	11	880	293	33.3
40歳代	34172	813	10	803	293	36.5
50歳代	43702	1047	8	1039	435	41.9
60歳代	28664	665	3	662	329	49.7
70歳代以上	24177	613	-	613	237	38.7
年齢不詳	-	-	-	-	5	-
合計	208290	5000	33	4967	1819	36.6

出典：平成13年度市民意識調査

市民意識調査では、以下の様に居住地区を分けている。(表6)地域別でかつ年代別のデータは市民意識調査報告書の中では示されていないため、本章では、地域別の分析は行っていない。

表6 平成13年度市民意識調査の全体の居住地区(生活圏)別回収状況

	人口*	発送数	返戻数	実質発送数	有効回収数	有効回収率(%)
加古川	42797	1028	7	1021	369	36.1
加古川北	18375	435	-	435	169	38.9
野口	28032	675	10	665	228	34.3
平岡	39406	949	1	948	351	37
浜の宮	35092	838	9	829	284	34.3
両荘	9257	225	-	225	74	32.9
加古川西	24599	590	5	585	248	42.4
志方	10732	260	1	259	89	34.4
地区不明	-	-	-	-	7	-
合計	208290	5000	33	4967	1819	36.6

*：20歳以上

出典：平成13年度市民意識調査

2 調査結果の概要からみた高齢期人口の加古川市に対する意識

2.1 市に対する全体評価

2.1.1 住みやすさと定住意向

高齢期人口の加古川市に対する住みやすさの評価を図1に示した。

男女ともに「住みよい」が最も多く、次いで「住みにくい」、「非常に住みやすい」が続いている。全体の結果と同じく、大半の人が「住みよい」と感じている。

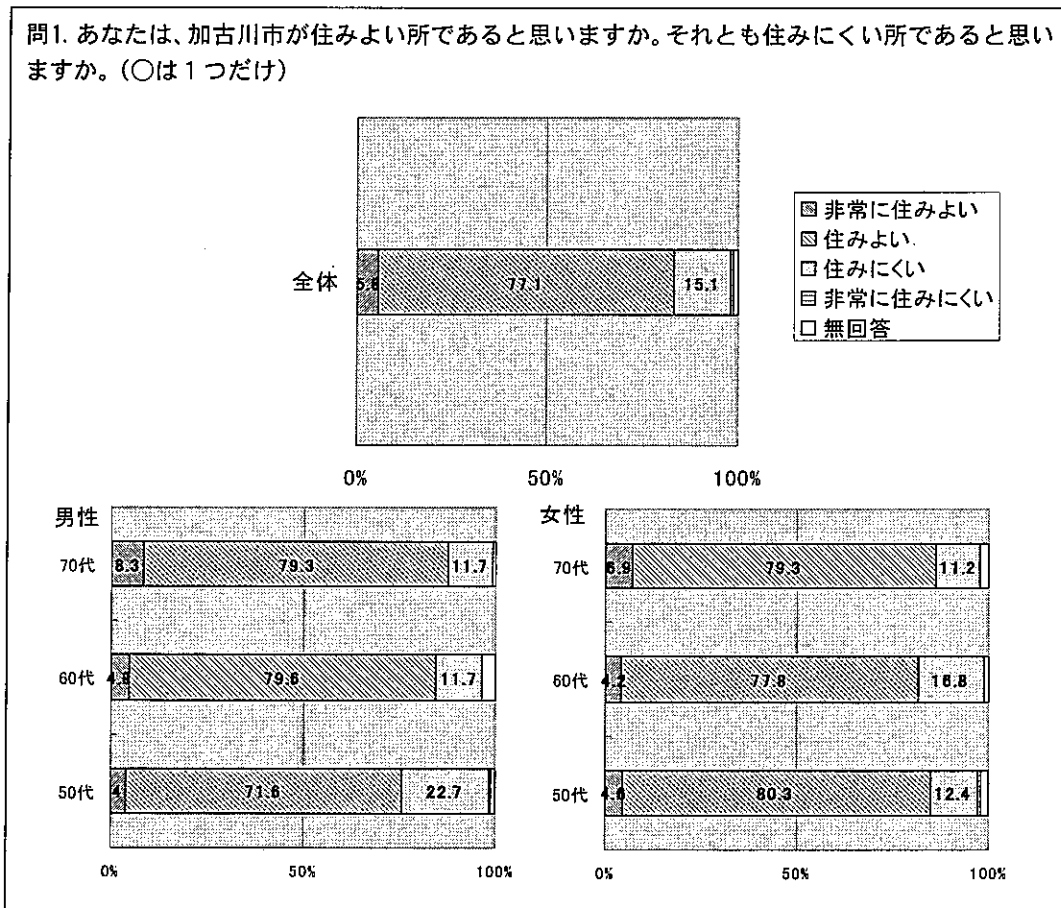


図1 高齢期人口の「住みやすさ」意識

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

男女別および年代別に「非常に住みよい」「住みよい」と肯定的な評価を示した率の増減を示したものが図2である。男女とも70代が最も住みよいと感じている割合が多く、男性では87.6%、女性は86.2%であった。しかし、50代と60代では性別によって傾向が違ふ。男性は、高齢になるほど住みよいと感じる人が増加しているが、女性では、60代で「住みにくい」と回答した人が60代男性そして50代女性よりも約5%増えている。言い換えると、男性では、退職前の世代である50代が最も「住みにくい」と感じており、20～40代の年代も含む全体の中でも最も高い比率を示した。一方、女性では、65歳となり自身も高齢者となる60代が高齢期の中では最も多く「住みにくい」と感じていた。女性の全体でみると、これは、30代、40代に続いて、3番目に「住みにくい」と感じている結果となっている。

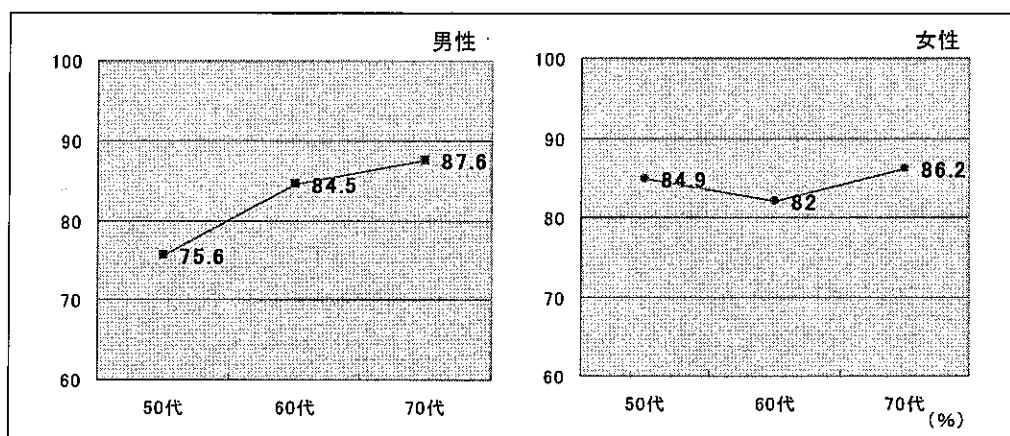


図2 高齢期人口の「非常に住みよい」および「住みよい」と回答した率

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

加古川市への定住意向としては、男女とも50代と60代以降では意識に差がみられる。(図3) 各年代とも「ずっと住み続けたい」と答えた人が最も多い結果となっているが、50代では60代、70代と比較して、その割合が減少している。「当分の間は住み続けたい」という回答が男女ともに50代では3つの年代の中で最も大きな割合を占めているためである。そして、1割程度の方は市外への転出を希望しているという結果となっていた。つまり、50代では約5割の人が、加古川市を終身の定住地として意識していないことが示された。

以上の住みやすさ評価と定住意向から、高齢期人口の中で加古川市への評価として最も低い結果を示したのは準高齢世代の50代という結果が明らかになった。高齢期の中で最も活力があり「戦力となる」50代にとっての魅力あるまちづくりは、加古川市の課題の1つである。

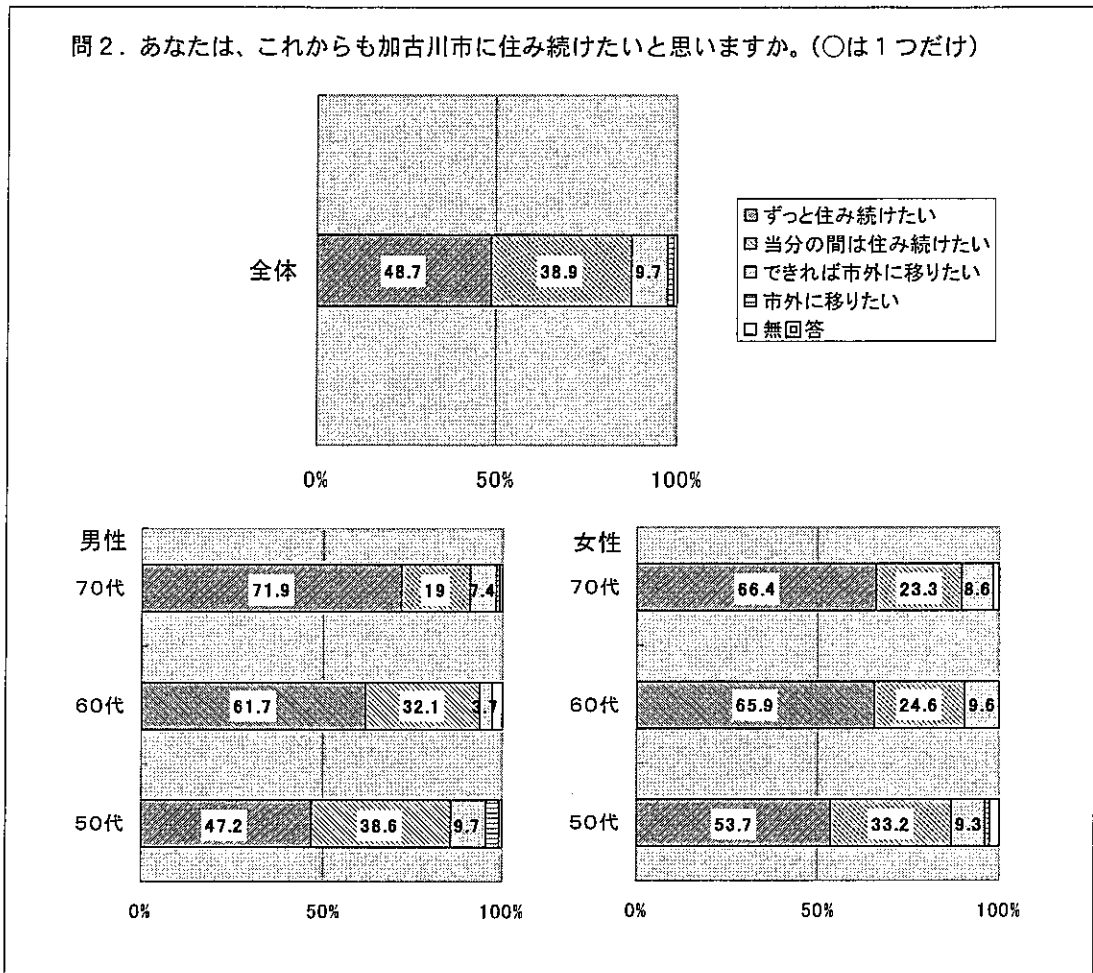


図3 高齢期人口の定住意向

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

2. 1. 2 生活評価にみる満足度が低いもの

生活環境に対する市民の意識を探るために使用された項目を表7に示した。

項目は、生活環境および市政全般に関する40項目にわたっていた。本章では、分析する目的で、独自にそれらの分類を行った。分類は、生活関連、整備関連、自然環境関連、福祉関連そしてその他となっている。分類に関しては、生活関連は主に日々の生活や個人の生活に関連すると思われるもの、整備関連は生活環境のための整備に関連すると思われるもの、自然環境関連は市民の生活環境を取り巻く自然環境に関連すると思われるもの、福祉関連は医療や保健福祉に関連するもの、そして、その他は以上の4項目に含まれないものを基準に分類を行った。表7には分類も併せて記している。

表7 生活環境評価項目と分類

	生活関連	整備	自然環境	福祉	その他
バスの利便性	○				
自宅周辺の道路の広さや舗装		○			
自宅周辺での子供の遊び場の確保		○			
河川等の水質や大気の汚染対策			○		
騒音、振動、悪臭等の対策			○		
道路網や橋の整備		○			
信号機、ガードレールなどの交通安全施設		○			
ゆとりと潤いのあるまちなみ		○			
公園や緑地の整備		○			
商業の振興					○
医療機関や診療体制				○	
鉄道の利便性	○				
下水道の整備		○			
高齢者への福祉施策				○	
水道水の安定供給と水質		○			
ごみの収集、処理対策	○				
地震、火災、水害などの災害対策					○
介護保険の取り組み				○	
青少年の健全育成				○	
緑化、自然保護の推進			○		
情報化社会への対応	○				
保育所などの児童福祉施策				○	
市役所、市民センターの利用のしやすさ	○				
高校、大学などの整備		○			
心身障害者(児)への福祉施策				○	
工業の振興					○
日常の買い物の利便性	○				
音楽界、美術展等の開催					○
幼稚園、小・中学校の施設や教育内容				○	
健康増進(ウェルネス)のための施策				○	
農林水産業の振興					○
隣近所とのつきあい、交流	○				
まちづくりへの市民参加					○
国際化への対応					○
住民健診や生活主看病予防活動				○	
母(父)子家庭への福祉施策				○	
男女共同参画社会の取り組み					○
生涯学習、文化サークル活動	○				
体力づくり、スポーツ活動の振興	○				
史跡、伝統文化等の保護					○

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

意識調査では、これらの項目を使用し生活環境の現状に対する市民の満足度が調べられた。評価方法には、「満足」「やや満足」「どちらでもない」「やや不満」「不満」の5段階評価が用いられている。図4は、高齢期の男女がそれぞれ満足度が低い（「不満」と「やや不満」を合わせた値が高いもの）と示した上位5項目をまとめたものである。

問2. あなたは、次に項目についてどの程度満足していますか。…それぞれについて、あなたのお考えに近いものを選んでください。(〇は1つずつ) (以下、「やや不満」と「不満」の回答を合わせた値が高いもの)

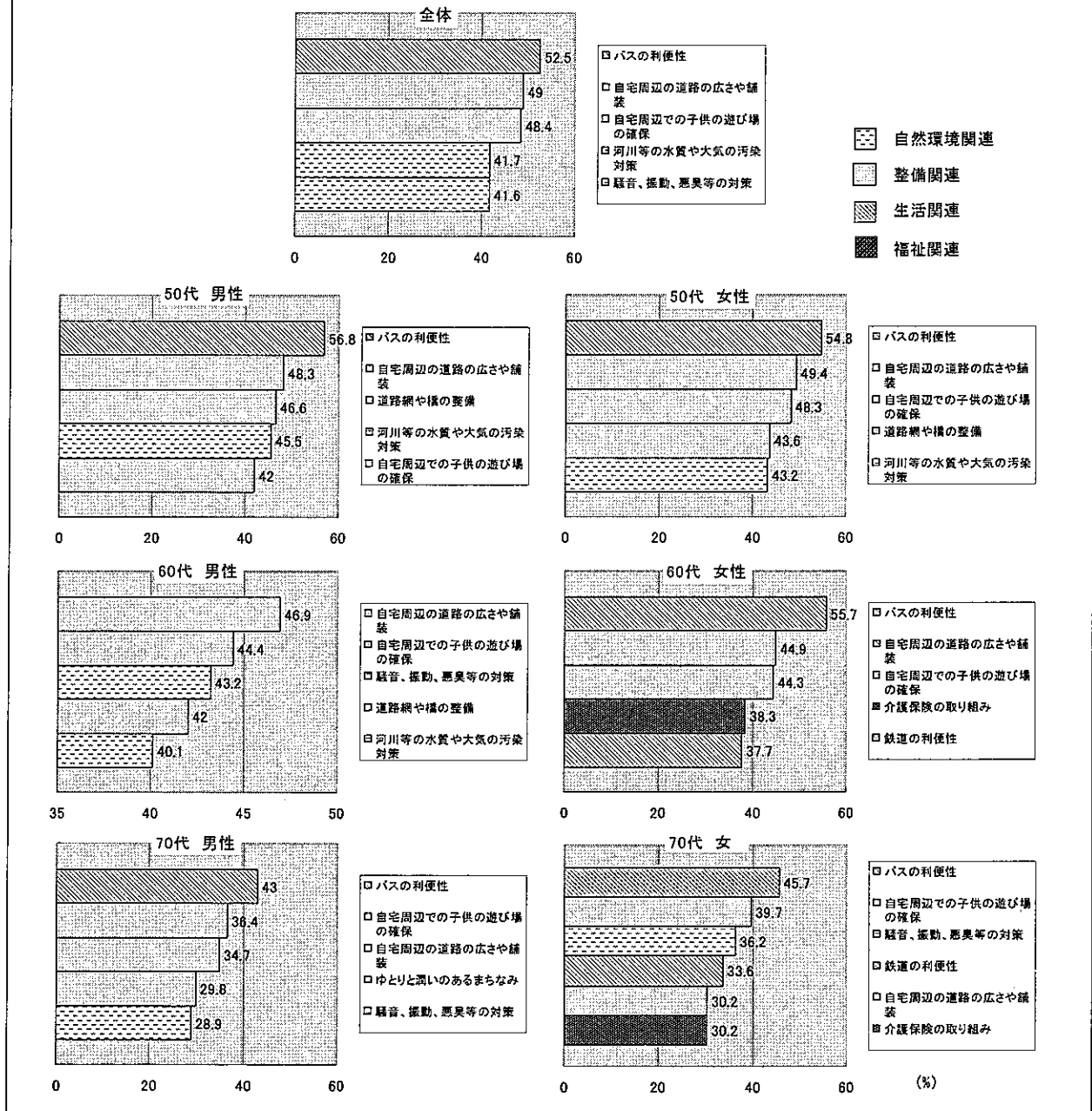


図4 高齢期人口の生活環境評価 満足度が低いもの、上位5項目

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

「バスの利便性」(生活関連項目)は、60代の男性を除いて、その他の高齢期世代に共通して、満足度が最も低い結果となっている。次点以下(2位~5位)は、それぞれ「自宅周辺の道路の広さや舗装」、「自宅周辺での子供の遊び場の確保」、「道路網や橋の整備」など整備関連や「河川等の水質や大気の汚染対策」や「騒音、振動、悪臭等の対策」という自然環境関連が続いていることが多い。その中でも差別化されるのは、60代と70代の女性の意識に「介護保険の取り組み」に対する満足度の低さが示されていることである。同項目は全年代(20~70代)の男性にはみられないものである。また、女性の中で

も、20～50代の女性にはみられない。このことから、60代・70代の女性にとって、高齢者介護の問題が生活の中で顕在化し、課題の1部として認識されていると推測できる。

2. 1. 3 生活評価にみる重要課題

意識調査では、表7で示した40項目について「特に重要である」「重要度が高い」「普通である」「重要度が低い」「全く重要でない」の5段階評価でどの程度重要視しているかを調べた。高齢期の男女がそれぞれ重要度が高い（「特に重要である」、「重要度が高い」）

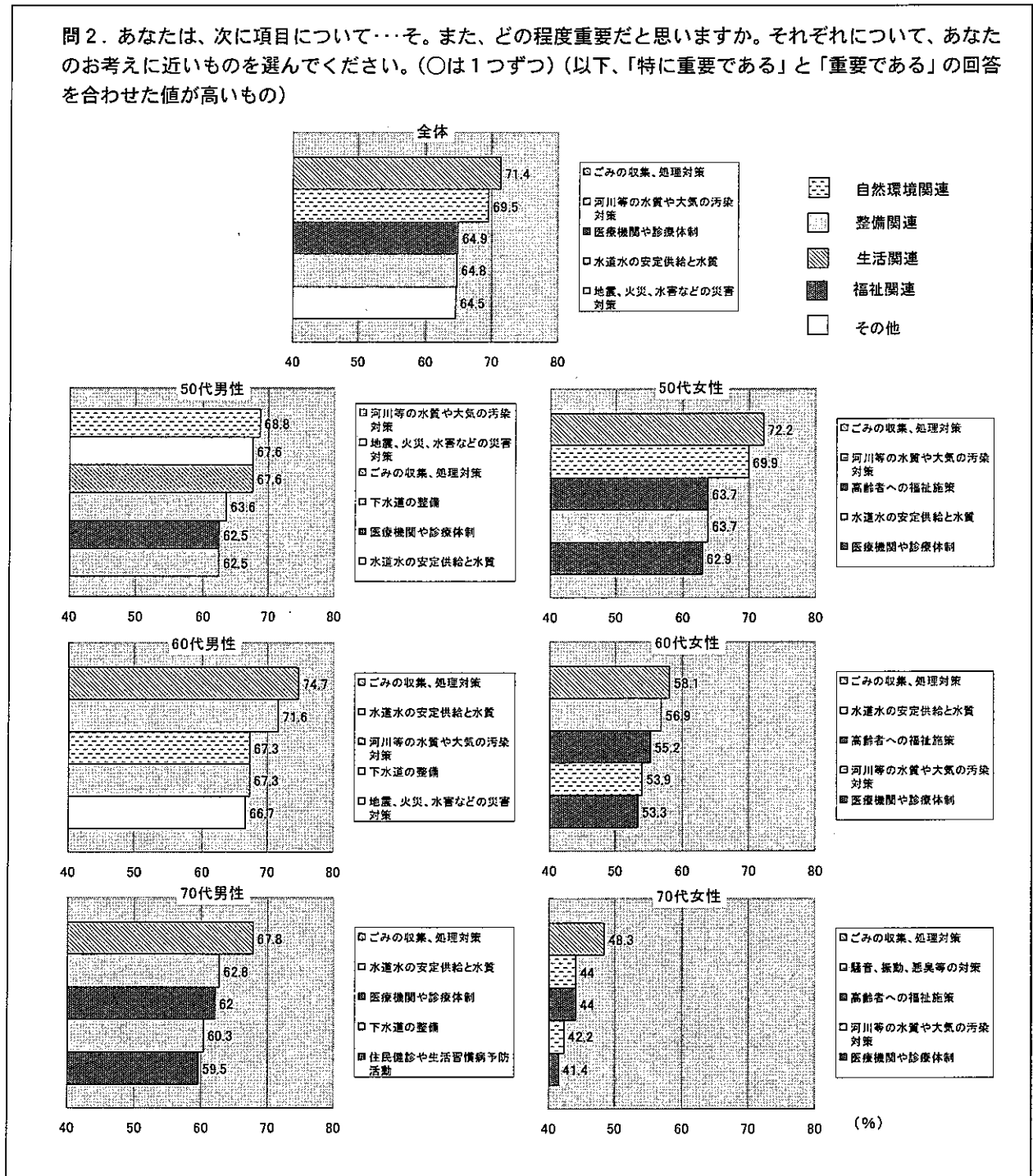


図5 高齢期人口の生活環境評価 重要度が高いもの、上位5項目

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

をあわせた値が高いもの)としたもののうち上位5項目をまとめた。(図5)

50代男性が最も重要であるとした「河川等の水質や待機の汚染対策」は、20～50代の男性および20～30代の女性も重要度が最も高い項目としてあげている。しかし、60代以上の男性および50代以上の女性では、「ごみの収集、処理対策」が1位に上げられていた。

性差が認められる項目としては、「高齢者への福祉施策」が女性では重要度が高いものとして3位に上げられているが、男性では、上位5項目中にはみられないという点である。また、女性の場合、高齢になるにつれて、回答の割合が低くなっているという点も示された。

これらのことから、高齢期人口にとっては、「ごみの収集、処理対策」という生活に密着した項目が最も重要な項目として認識されていること、また、女性の場合、2.1.2でも示されたように、「高齢者への福祉施策」が重要項目として認識されていることが明らかになった。

2. 2 市の将来像

2. 2. 1 暮らしてみたいまち

表8は市民が暮らしてみたいと感じるまちを調べるために使用された項目である。

図6はの全体(20～70代)の回答者が「暮らしてみたいまち」として回答した順にまとめたものである。「安全なまち」が61.7%と最も多く、次いで「快適居住のまち」が53.8%、「自然豊かなまち」35.7%、「福祉のまち」30.9%、「交通の便利なまち」26.7%となっていた。

表8 暮らしてみたい「まち」の調査項目

安全なまち	事故や災害、犯罪のないまち
快適居住のまち	住環境がよく整備され、暮らしやすいまち
自然豊かなまち	緑が豊かで、土や水に親しめるまち
福祉のまち	障害者や高齢者などを大切にするまち
交通の便利なまち	道路や鉄道などが整備されたまち
商業のまち	娯楽や買い物を楽しめるまち
産業のまち	産業が盛んで、働く場も多いまち
生涯学習のまち	年齢を問わず教養や能力を高められるまち
ふれあいのまち	心の交流を重視するまち
スポーツ・健康のまち	スポーツに親しみ、健康増進を重視するまち
文化のまち	芸術や文化活動の盛んなまち
歴史のあるまち	史跡や文化財、伝統などを大切にするまち
高度情報化のまち	情報や通信機能の発達したまち
国際交流のまち	外国との交流が活発なまち
その他	
特になし	

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

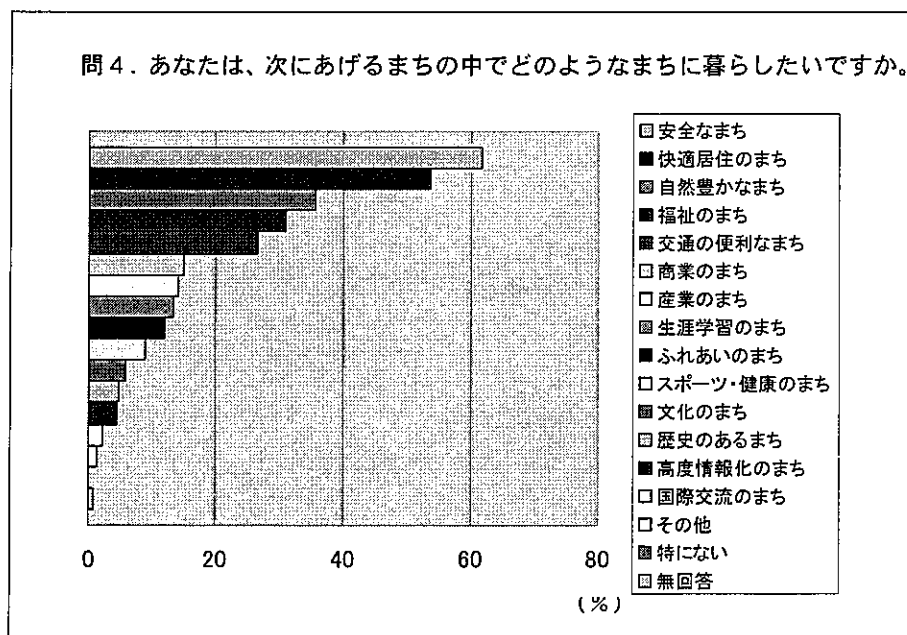


図6 暮らしてみたいと思う「まち」全体
参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

高齢期人口が暮らしてみたいと思うまちを図7にまとめている。

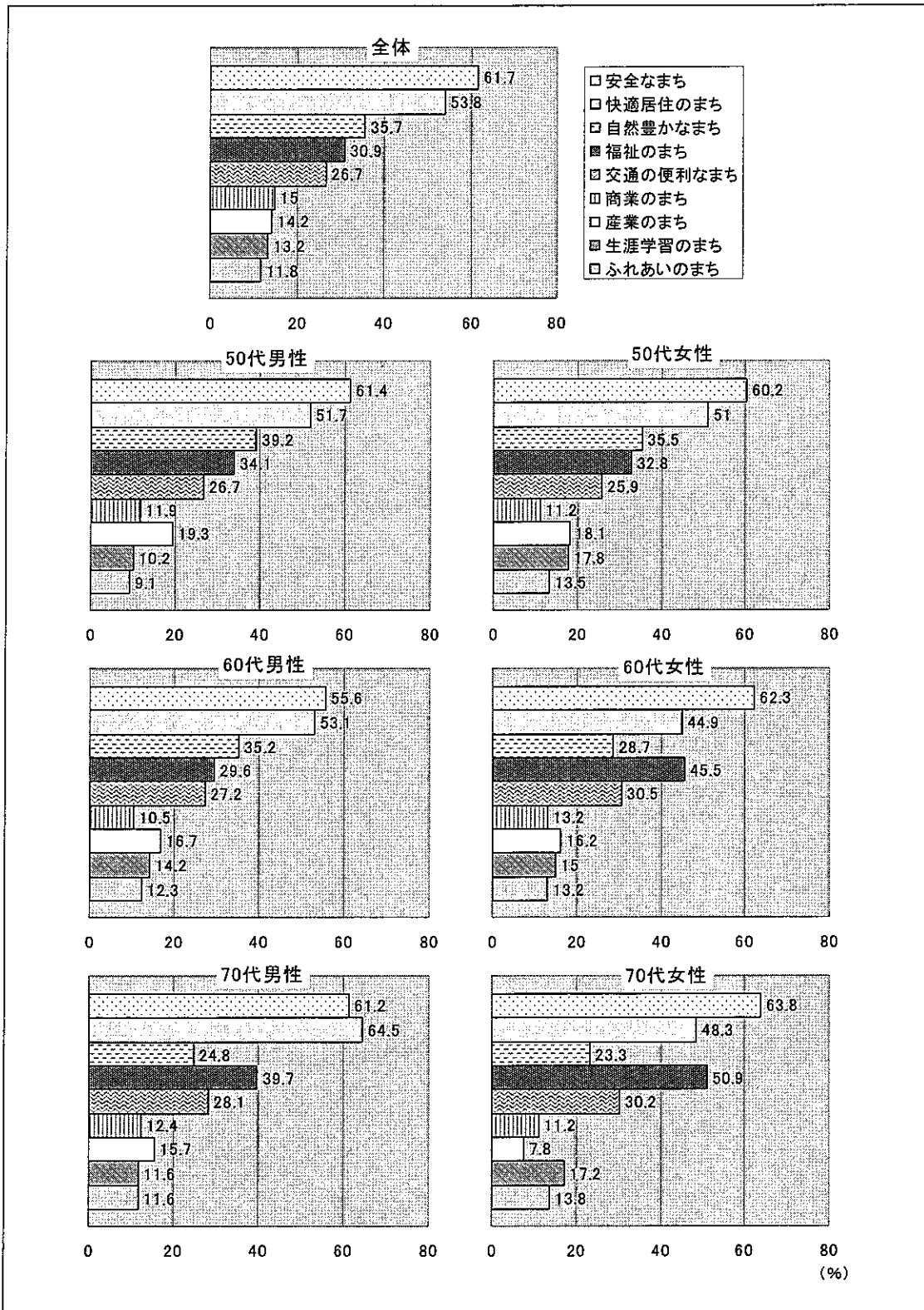


図7 暮らしてみたいまち 高齢期人口

参考：加古川市 平成13年度市民意識調査報告書

高齢になるにつれて項目順位の変化がみられる。50代男女では「商業のまち」が6位からそれぞれ7位と9位に順位が下がっている。その他は全体が示した順位と同じであった。60代男性では50代女性が示した順位と同じく「商業のまち」が9位となっている。

60代女性、70代男女では、順位が大きく変化している。特に、「福祉のまち」の順位が、60代女性では2位へ、70代男性では3位へ、そして、70代女性では2位へと順位が上っていた。

3 第3章のまとめ

加古川市が実施した平成13年度市民意識調査結果から、「住みやすさと定住意向」、「生活評価にみる満足度が低い項目」、「生活項目にみる重要課題」そして「市の将来像－暮らしてみたいまち」項目に焦点を当て、50代、60代そして70代以上の高齢期人口の意識を男女別にまとめた。以下に、結果をまとめる。

- * 「住みやすさ」評価では、50代男性と60代女性が最も「住みにくい」と感じていることが明らかになった。さらに、「定住意向」評価では、男女ともに60代を境に50代とそれ以上の高齢期人口の意識に差が認められた。男女ともに「ずっと住み続けたい」とする回答が最も多く、高齢になるに従ってその傾向も増している。しかし、50代男女では定住意向を示しているのは5割のみに留まる結果となっていた。
- * 「生活評価にみる満足度が低い項目」では、60代男性を除いて「バスの利便性」（生活関連項目）が最も満足度が低い項目となっていた。また、60代・70代女性では「介護保険の取り組み」（福祉関連項目）が満足度が低い項目に上げられていた。同項目は20代以上の全世代の男性および20～50代女性には満足度が低いものとして上位に挙げられていない。
- * 「生活項目にみる重要課題」では、50代男性は「河川等の水質や大気汚染対策」を最も重要度が高いものとして上げている。これは、20～40代男性と20～30代女性の若い世代と同じ結果であった。しかし、高齢になるにつれて回答に変化がみられる。つまり、60代以上の男性および50代以上の女性では、「ごみの収集、処理対策」（生活関連項目）が最も重要度が高いものとして示されていた。また、「高齢者への福祉対策」（福祉関連項目）が女性では重要度が高い項目として上位5項目に挙げられていたが、これは、男性にはみられないことであった。
- * 「市の将来像－暮らしてみたいまち」においても、同様に60代以降の世代の意識が50代とは違うことが示された。60代男性では、50代女性と同じ順位を示しており、「商業のまち」が9位へ下がっている。大きな違いは、「福祉のまち」が70代以上の男性および60代以上の女性が順位を上げて示しているという点である。70代男性では3位に、60代以上の女性では2位に挙げられている。

以上のことから、市民意識調査から得た基本構想に対して重要と思われるポイントをまとめる。

- ① 50代男女および60代女性の居住環境としての加古川市への評価が低いという事実から、「戦力となるステージ」の市への評価や定住意向の向上に対する取り組みの必要性が示唆されている。
- ② 60代を境に、50代と60代以上の世代での意識の格差がみとられることから、「戦力となるステージ」に対する対策の差別化が重要であることが示唆されている。
- ③ 女性では、高齢者福祉の向上に対する対策が1つのポイントである。
- ④ 高齢者になるにつれて、生活関連の項目が重要項目として挙げられていることから、基本構想の施策の方向づけにおいても、生活に関連した項目の重要性を認識することが必要である。